大坂観の近世的展開

鎌田道隆

(一) はじめに

私たちは近代社会で生活し、近代的価値観のなかにどっぷりとつかった日常を生きている。近代的価値観とは何だろう。進歩、発展、早さ、便利、合理的等々の概念もそれである。近代人なら誰でもが賛意を表する価値意識、それを近代的価値観とよんでよいだろう。

もちろん、近代的価値観はもともと人間的な規模と尺度に準拠していたはずであるが、むしろ今日では非人間的な機械的価値の面が強くなってしまったように思える。そして、その人間味を失った近代的価値観を、私たちは無批判に受け入れてしまってはいないだろうか。歴史学の研究にあたって、形骸化された価値観をもってさまざまな分析や評価を行なったりしてはいないだろうか。近世都市の研究の分野でも、経済的な発展や合理的な都市運営のしくみなどに着目し、どれだけ近代都市へ近づいたかといった視点のみにとらわれてはいなかっただろうか。

ひとつの便利さを手に入れるために何を失ったのか。一見非合理的に見える昔の人々の生き方のなかに、どのような智恵や工夫や願いがこめられていたのか。形骸化された近代的な物指しで歴史研究をすすめるのではなく、歴史のなかに本来の人間を発見する作業も現在の歴史学には必要なことではあるまいか。

現代の大阪に関する評価は、新聞の投書や論評などをみていても決して芳しくはない。開発が産業中心に行なわれ、人間的文化的な視点が弱いということになるのかもしれないが、江戸時代の大坂[1]についてみるならば、相当に魅力的な都市である。大坂には近世の都市としての魅力がみ

なぎっており、都市の個性としても充分なものをもっているかに見える。

近世都市大坂について、近代大阪にどれだけ近づいたかという視点ではなく、都市大坂のなかに人間性がどのように定着しているか、大坂がいかに人間を大切にする都市であったかを追跡してみたい。しかし、これは一つの試論にすぎない。とりあえず、江戸時代の人は大坂をどのように見ていたかということから、はじめに外国人の大坂観をみる。つぎに日本国内では大坂はどのように紹介されていたか、また旅人は大坂のどこに魅力を発見していたかを考察する。さらに大坂が近郷近在との深い交流のなかで都市問題に折り合いをつけながら、「大」大坂を成立させてくる過程をみていくこととする。

(二) 外国人の見た「大坂」

まず大坂という都市を、江戸時代の人びとはどのように見ていたか、という大坂観の検討から始めよう。江戸時代の大坂に対する観察と評価でもっともすぐれている記録は、やはり外国人たちのものであろう。

文政九年(一八二六)二月五日、太陽暦では三月十三日にあたる。この日、オランダ東インド会社から派遣された江戸参府の一行が西ノ宮を朝出立し尼崎から神崎川を経て、昼すぎには大坂に入っていた。この一行の随員の一人であったシーボルトは、「二時四十五分大阪の前駅に到着したり。ここは人通り甚賑やかに、住民は事務と業務とに間断なく従事するにて、今まで経来りたる町々とは異なれり。天候濁り曇るため、大阪市が宏濶たる平野に在りながら、南の地平線に暗く覆はれて、明らかに眺望し得ぬは遺憾なりき。されど蔬菜の圃、花卉の園は屢々我が眼前に現はれ、高く抜ける屋の棟、高き松の梢、城壘の楼台が霧に包まれて遠くに隠見するを望み得て、初めてそが一大商業市なることを知りたり」[2]と、霧のなかに遠くかすんで見える大坂を、はじめて自分の眼でとらえた感動を伝えている。

シーボルトは、大坂が日本の代表的な商業都市であるという知識を、あらかじめもっていたと考えられる。しかし、実際に自ら大坂に入って実地に見聞することで、商業都市大坂をいっそう明瞭に理解したに違いない。とりわけ、その立地としての港湾機能には注目している。シーボルトの観察記録の一部をみてみよう。[3]

大阪市が適幸なる位置を占むるといふべきは、一方淀

河に貫流せられ、他方西南海に浸さるゝによるなり。本々大阪は商業都市として一大要地たり。市には二港あり。其の一ツは大きくして木津川の河口にあり、又一ツは安治川の河口にあり。甲は四国、九州、日本本土の東岸よりの船舶の入る所にして、乙は四国、中国の船舶の入る所とす。安治河口の港は浅くして大船を入れぬ故、舟航には甚適好ならず、されど安治川木津川に乗入るゝ船の数は夥くして、平均千隻の大小船舶がいつも大阪の港に停泊すると思ふてよし。大阪市は日本全国の内地貿易の中心地なり。各州の最優れたる産物は此に輻輳し来りて、また全国各地に分配送致せらる。外国貿易は内国貿易と比べては左程ならぬも、こゝの製銅事業は、外国貿易の本源と見るべし。

シーボルトは、海に面した河口に立地する大坂は、国内交易の中心地として物資の集散地となっていること、しかし河口の土砂堆積による港湾機能に若干の問題があることも看破している。そして、大坂は国内貿易の中心というだけでなく、「此市の商人は、江戸・堺の商人とともに和蘭人・支那人のする輸入貿易につきて、其特権による利得もあれど、その最大の配当（ワケマエ）を占取」しているという。(4)

外国貿易の本源としてもっとも重要であるとしてシーボルトが注目した大坂の製銅事業に、技術的な面で深い関心を示したのは、シーボルトよりも約半世紀前の安永五年（一七七六）に、同じく江戸参府の随員として来日した博物学者のツンベルグである。ツンベルグは応接の役人に懇願して、大坂の製銅工場見学にこぎつけ、溶解の過程を詳細に観察している。そして「欧州では、日本人が水のなかに銅を流すことはこれまで知られていなかった。これは我々瑞典人が病児の頭上で溶けた鉛を水のうちに流しこむのと殆んど同じ方法である。この方法によるからこそ、日本の銅は美事な輝く色を持っているのである」と、西洋でも高く評価される日本の製銅技術に敬意を表している。(5)

ツンベルグも、大坂は「海に臨み同時に全国の中央に位置を占めているものだから、日本ぢうで最も殷賑な場所となったのである」と言い、「この土地にはあらゆる種類の享楽機関があるので、富裕な人が群をなしてこゝに住居を定めている。この人たちが金を使ひ、工人が工作に従ひ、商人が活動するので、大坂は日本の巴里になっている」と、パリのような都市的繁栄を大坂のなかに見いだしている。(6)

日本のパリであるという評価をあたえたほど、ツンベル

グは大坂が気に入ったらしい。「我々はこの旅次の間、これほど楽しく時を送ったことはなかった」とツンベルグが感激した大坂見物は、駕籠に乗って町々をめぐり、芝居や踊りをはじめ「この町の持てる珍しきものは大部分を見」ることができたからであったが、とりわけ「小鳥の通」を散策し、「植物園」を見て鉢植えの草や灌木を買い、そして銅の溶解所を見学できたことがうれしかったという。[7]「小鳥の通」や「植物園」が、大坂のどこをさしているかを具体的に示す記述は見あたらなく日本側の史料でも特定は難しいが、同様の記述は前述のシーボルトの記録にも見え、植木屋や動物を売る町通りをシーボルトも訪れたという。『摂津名所図会』に描かれている孔雀茶屋[8]や、植木市[9]または薬草園などのようなものであったかもしれないが、大坂が単なる商業貿易都市としての顔だけでなく、さまざまな遊楽を堪能できる文化都市としても成長していることを、ツンベルグの観察は伝えているようである。

大坂の市街景観については、ツンベルグの来坂よりさらに八六年前の元禄四年(一六九一)に、やはり同じく江戸参府の随員として来日したケンプェルの『ケンプェル江戸参府紀行』に詳しい。

市の街路はかなり狭く、多くは普通の小路なり。規則正しく南へ走るものと西へ走るものと、糸の如く細く、縦横直角に交錯したり。たゞ海に近き市の区域にありては、町筋は河流に旁ひて西、南西に向ふ。必ずしも規則正しき筋をなさず。市街の路面は甚だ清潔なれど敷石は施さず、両側に家屋の前には雨水を落すため、歩行を便にせんがため、粗造(マラツクリ)の方形の石にて小さき溝をつくりたり。各街頭には堅固なる門ありて、夜間は尽くそれを鎖して、町長乙名の旅券なくば何人と雖も、一ツの町より他の町に通るを許さず、又各街に格子に囲みたる場所に、色々の消防具を容れたるあり。その傍には蓋(フタ)したる井戸あり。是も火事の場合の用に供ふるなり。[10]

じつによく十七世紀末の大坂の市街景観を描いている。また家屋の内外観についても、日本人の記録には見られないような観察眼で注目している。もうすこしケンプェルの記録を引用してみよう。

家屋は此国の法規により、又此国の風習によりて、いずれも二階建のみ。各階一尋半(ひろ)又二尋を越ゆるを得ず、松材に粘土・石灰をあしらひて築く。外より見るに各

戸ともに、戸口と戸障子とにて開放すべき肆店(ミセ)又は前方の部屋に於て、彼等はその打開きて何人の眼にも晒らされたる場所に於て、その物品を販売し、または人目を避けずに技術を施し製作をなすなり。その前には、必ず短かき黒き木綿の布片を上より懸けて、風雨を防ぎ其他の天候の害より護らんがために備へ、又は粧飾となし、時としては其処にて何を購(アガナ)ふべきかの招牌(カンバン)となすなり屋根は平らにして高く、良き家は扁平にして黒く焼きたる石を石灰にて据え、普通人民の屋根覆には、たゞ薄板を用ふるのみ。(11)

大坂の町屋は戸や障子で仕切られてはいるが、町通りからはまる見えの構造であること、しかも通りに近い部屋の通行人にもよく見える場所で物品を販売し、また人目をさけることなく技術を駆使した製造にとりくんでいるというケンプェルの報告は貴重である。こうした光景は大坂だけのものではなかったと思われるが、日本の近世の都市では通りと町並みが一体となった親しみのある開放的な雰囲気をもっていたことを、前述の記録は伝えている。とくに大坂では、そうした明るく活動的な空気が、町家のなかから街路にまであふれだし、都市全体にみなぎっていたのかもしれない。

ケンプェルは、大坂はとても暮らしやすいところであるとともに、奢侈と肉体的な悦楽とのあふれるところであるので、「日本人はみな大坂をば逸予歓楽の観場・戯園と言ひ做すなり」(12)と、日本人が大坂について遊興都市として見なしているのだと述べている。ケンプェルもツンベルグもシーボルトも、十八～十九世紀に来阪した外国人たちは、大坂が商業都市であるとともに、遊興・歓楽の都市であると一様に見ている。そして、日本人自身も同じような大坂観をもっていたという。

(三) 日本人の「大坂」観

江戸時代の大坂を天下の台所と評することは、今日では日本史の常識のごとくなっているが、当時の人々はどのような大坂観をもっていたのであろうか。天保十四年(一八四三)三月から翌年十月にかけて大坂西町奉行であった久須美佐渡守祐明の『浪花の風』も、外国人の観察におとらぬ筆致で、大坂の位置と繁栄ぶりをみごとに伝えている。

浪花の地は、日本国中船路の枢要にして、財物輻輳の地なり。故に世俗の諺にも、大坂は日本国中の賄所と

いひ、又は台所なりとも云ふ。実に其の地巨商・富裕軒を並べ、諸国の商船常に碇泊し、両川口よりして市中縦横に通船の川船ありて、米穀をはじめ日用の品はいふに及ばず、異国舶来の品に至る迄、直に寄場と通商なるが故に、何一つ欠るものなし。[13]

天保年間すでに「世俗の諺」として、大坂を日本の台所というよび方があった。久須美祐明の前任者、天保十二年六月から天保十四年二月まで西町奉行であった阿部遠江守正蔵の『諸色取締方之儀ニ付奉伺候書付』のなかにも「大坂表之義は諸国取引第一之場所ニ而、(中略)金銀融通も宜候ニ付、世俗諸国之台所と相唱、取引多端の所柄ニ有之」とあり、[14]やはり大坂を世俗に諸国の台所と見る見方があったことを伝えている。また幕末の大坂を語る『御用金之控』にも、「大坂ハ日本の台所ニ而富豪之者相集、輻輳之土地とも被言候」[15]云々と見える。

日本の台所という大坂観は、大坂が日本第一の商業都市であるという認識を示すものであるが、その大坂経済を支えていたのは、港湾都市としての船運にあったといえよう。広瀬旭荘が『九桂堂随筆』のなかで、「人云フ天下ノ貨七分ハ浪華ニアリ、浪華ノ貨七分ハ舟中ニアリト」と述べたことはあまりにも有名である。これは、商都大坂における水運の意義を直截に言いあらわしている言葉である。

自然的な立地とともに、河川を整備し、堀割を造成し、橋をかけ、港をつくり、倉庫を設け運輸のための組織とルールをつくりあげるといった人為的な商業都市づくりの営みを前提として、日本国内はもとより外国人たちにも、活力ある大商業都市大坂という評価があったことはいうまでもない。

経済的に活気があり、街は清潔で美しく、遊興・娯楽の場も豊富であるという報告を、大坂を訪れた外国人たちは本国へ伝えているのであるが、物価が安くて住みやすく楽しい大坂の魅力を、日本国内の人々が理解できないことはないはずである。日本国内では、大坂はどのように紹介されていたのだろうか。名所案内記や地誌類あるいは旅行記・随筆などを素材として、大坂の都市としての魅力を、江戸時代の日本人はどのように理解していたか考察してみることにしよう。

大坂案内記のもっとも早いものの一つに『蘆分船』がある。著者は一無軒道治で延宝三年(一六七五)に刊行されたものであるが、著者は著述の動機について、天満宮に詣で

たときに大坂の名高き神社仏閣のことを書き記しておきたいと思ったと書いている。[16] しかし、こうした都市の名所案内記の先例として、すでに早く明暦四年（一六五八）刊の『京童』、寛文五年（一六六五）刊の『京雀』、寛文七年刊『京童跡追』などが京都にあった。おそらく、これら京都案内記の影響が、大坂案内記の誕生にも強く作用していたはずである。

『蘆分船』が、ほぼ『京童』と同様の内容、すなわち神社・仏閣・名所・旧跡などの由来や縁起・伝説を紹介し、絵を載せ、古歌を引いていることも、両者の密接な関係を示しており、さらに古歌に詠まれた地を名所とする名所観でも軌を一にしている。

延宝八年（一六八〇）に同じ一無軒道治の著で出版された『難波鑑』は『蘆分船』の姉妹編といえるが、社寺における神事や仏事、市中における年中行事を月日を追ってつづったものである。諸行事の光景とともに、そのいわれやあらましが記されており、やや風俗誌的傾斜はみせているものの、『蘆分船』と同じ視点からの大坂案内であることに基本的な変化はない。

こうした社寺や名所・旧跡案内から、大きく性格を変えた都市としての大坂案内記が、十七世紀末には登場してくる。これは、京都における『京童』から『京雀』への転回、そして『京羽二重』への発展に相当する。延宝七年三月刊の『懐宝難波雀』、同年五月刊の『増補難波雀跡追』、同年七月刊の『難波鶴』、同年八月刊の『難波鶴跡追』、さらに貞享から元禄初年の一六八〇年代に刊行された『古今蘆分鶴大全』などは、大坂の諸役人や諸藩の蔵屋敷をはじめ諸職名匠や諸師諸芸の人名を収録しており、地誌的な新しいかたちの大坂案内となっている。

そして元禄九年（一六九六）には、これらの新しいかたちの大坂案内記の集大成版あるいは総合的大坂案内記とでも評すべき『摂州難波丸』が出版されている。これは翌年には日本全国の地誌案内記である『国家万葉記』に再録されるが、のちに大坂の代表的な案内誌と高く評価される『改正増補難波丸綱目』の先駆となるものであり、注目される。[17]

『摂州難波丸』は、大坂および近辺を中心とする武鑑および町鑑であり、具体的な人名・町名・職掌等を列記したものである。時事的な要素を完備しているということは、その時代の大坂を知る貴重な手がかりであるけれども、時代の移りかわりとともに改訂を余儀なくさせる性質をもっ

ている。『摂州難波丸』が『国家万葉記』に再録された元禄十年から五十年後の延享五年（一七四八）『改正増補難波丸綱目』が出版された。そして、同書は以後天保十年（一八三九）までに七回の改訂版の発行をみている。このことは、この案内誌の需要の高さをものがたるとともに、時事的な性格に重点があったことをも示している。

大坂城代、城番衆、町奉行、諸役人等の武鑑的要素はともかく、「大坂竪横町之名」「町図」以下、上方代官や堂上方の用達所から諸大名蔵屋敷所在地と留主居役人をはじめ、諸問屋、船宿、諸芸、諸職、飛脚宿等の人名、諸商売のいろは別業種名寄せなどを収録した『摂州難波丸』の歴史的な意義は、大坂という都市を語るのに、大坂の町々やそこで営まれる庶民の生業を具体的に示すかたちをとったところにある。名所や古歌や社寺・史跡を見るだけでなく、大坂の町と商売を見なければ大坂を案内したことにはならないという視点が、編集方針にあったのではないかと思う。もうすこし強く言いかえるなら、庶民を語らずして大坂を語ることができないという都市観の成立を、『摂州難波丸』以降の新しい大坂案内記の登場にみることができるのではないか。

そうした都市観の形成は、十七世紀末から町人の実力に支えられて都市的基盤を定立してきた近世都市大坂の現実を反映したものであるに相違ない。町人たちが雑踏し活躍する町々こそ、大坂の顔であった。元禄という時代はまさに庶民を都市の主人公として登場させた時代であり、そして活力ある町人の生活文化が、大坂独特の庶民的な盛り場を市中の各所に成立させていったのである。

同じような近世都市としての特質は、『摂州難波丸』に先行する『京羽二重』をみてみることで京都においても同様に指摘できるが、『京羽二重』に登場する京都町人と、『摂州難波丸』の大坂町人では若干の相違があるように思われる。すなわち、『京羽二重』の「諸師諸芸」や「諸職名匠」の欄にあらわれる町人は、京都朝廷とのつながりや家名・由緒を重視するかたちで、御何々師、何々所、また受領名をいただいた職人・商人として登場する。[18] いっぽう大坂の場合には、そうした伝統や由緒よりも、諸国問屋や船宿などの書きあげといった商業的営為が強く意識された町人の登場となっているように見える。おそらく、同じ近世都市とはいえ、京都と大坂の都市的性格の相違が、そこにあらわれているのである。

大坂の特質は、日本全国へ向って経済的に開かれた都市であるという点にあるだろう。志田垣与助によって著わされて延享五年（一七四八）に刊行された『改正増補 難波丸綱目』から、全国との深いつながりをもって大坂の都市構造を形成しているいくつかの部門をとりあげてみよう。(19)

まずその全国的様相の筆頭は「御大名衆御蔵屋鋪付留主居役人幷名代蔵本掛屋用聞名寄」の項であろう。この項には、大名旗本を合わせ二百九十一名が収録されており、彼らが何らかのかたちで大坂との直接的なつながりをもつことを示している。

諸大名（諸藩）の大坂蔵屋敷が、土佐堀や中ノ島の浜地沿いに林立し、大坂経済の基幹をなしていることは周知のとおりである。もちろん大坂に蔵屋敷をもつということは、蔵米を大坂で販売しようという積極的な大坂市場との関係をもとめる姿勢のあらわれである。こうした蔵屋敷または藩邸を大坂に設けているのは、さきにあげた二九一家中で一〇六を数える。その分布は全国におよんでおり、北は奥州津軽（弘前）藩津軽氏、奥州棚倉藩松平氏、南は薩摩鹿児島藩島津氏、肥後熊本藩細川氏などの名が見え、大坂近辺では摂津尼崎藩松平氏、和泉岸和田藩岡部氏なども蔵屋敷を設けている。藩邸や蔵屋敷には、各藩の藩士が役人として詰めているわけであるが、大坂における交易面でこれらの藩役人の相談相手または手先となって活躍したのは大坂町人である。たとえば、越後高田藩十九万石榊原氏は常安町に蔵屋敷を設けて小倉治部左衛門という人物を留守居役人に任じているが、名代として「常安町三文字屋喜左衛門」、蔵元として「京都ひのや又右衛門出店西信町代藤兵衛」「同ひのや甚太郎出店呉服町代庄左衛門」「新靱町助松屋三郎太郎」の三名、銀掛屋としては蔵元のうちの「助松屋三郎太郎」、用聞として「北革屋町伊勢屋武右衛門」といった大坂町人と特別な結びつきをもっている。(20) 藩邸や蔵屋敷を大坂に設けてはいない大名や旗本であっても、蔵元、銀掛屋、用聞などの名目で、特定の大坂町人とのつながりをもっているものも少くはない。こうした傾向は、旗本層においてとくに顕著に見える。

ところで、御用達の町人について、大坂町人側から事情をみてみると、おそらく有力町人であるということが条件となっているのであろうが、一町人でいくつかの複数の家中の御用達となっている例がある。たとえば、備前岡山藩の蔵元である今橋二丁目の鴻池善右衛門は、筑前福岡藩の

別表　諸国問屋・船宿数

地域	問屋	船宿
関東筋	168	
陸奥國	20	2
松前國	7	
出羽國	31	
駿河遠江國	9	
尾張國	43	2
伊勢國志摩國	42	2
加賀能登中國	23	2
越後國	21	1
越前國	12	
若狭因幡國	3	2
丹後國	4	1
但馬國	10	1
石見國	18	2
出雲國	14	3
伯耆隠岐國	5	3
摂津國	88	25
和泉國	65	17
紀伊國	139	20
土佐國	63	24
伊予國	66	15
讃岐國	76	20
阿波國	99	23
淡路國	42	9
播磨國	164	28
備前國	67	4
備中國	38	8
備後國	56	
安芸國	63	11
長門國	30	5
豊前國	24	8
豊後國	53	14
肥前國	121	6
筑前國	12	5
筑後國	16	3
日向國	74	5
大隅薩摩國	16	1
壱岐國	3	1
対馬國	6	
周防國	3	5
肥後國		1
計	1,814	279

（延享版『改正増補難波丸綱目』より作成）

蔵元と銀掛屋を兼ねており、さらに芸州広島藩の蔵元・銀掛屋なども兼営している。同様の例は、旗本層の用聞の場合にはさらに顕著である。谷町二丁目の豊嶋屋庄兵衛の場合、池田伝之助、畠山国資、服部頼母、服部九十郎、大橋源兵衛、小笠原主殿、船越左衛門、船越三郎四郎、安部助九郎、安部外記、安部主膳、青木一都、青木直宿、青山丹下、青山忠次郎の十五名の用聞を兼ねている。[21]

全国各地の領主財政が商業都市大坂に依存している姿であるが、それは大坂商人が領主経済にくいこむかたちで進行しているといってよいだろう。いわゆる国問屋についてみてみると、全国的な広がりをもつ大坂町人の活躍をより一層明瞭にみることができる。

『改正増補難波丸綱目』の「諸国問屋幷船宿」の項[22]を、問屋数・船宿数として掲出したのが別表である。国問屋の延総数は一八一四、船宿数は二七九となる。関東筋として一括されるものを除いて、国名があがっているのは松前から薩摩まで四七カ国をかぞえる。延享年間ころの大坂三郷の町数をおおよそ六〇〇町くらいとすると、[23]一町平均三軒ずつの国問屋が大坂では分布している勘定となる。実際には特定の町に集中することが多いので、そうした町においては、特定の国々とのとりわけ密接な関係が幾重にも交錯しながら形成されていることになる。一例をあげると、雑喉場町

には播磨国問屋だけで十六軒、摂津国問屋が十六軒、和泉国問屋が七軒、紀伊国問屋が六軒等々といったぐあいである。

国問屋や船宿以外でも、全国各地との特別なつながりをもつ大坂商人の職種は少くない。『改正増補難波丸綱目』によると、材木問屋の場合、阿波材木問屋、日向材木問屋、北国材木問屋、秋田材木問屋、尾張材木問屋、土佐材木問屋、などのように産地別問屋がすでに存在している。(24)

大坂が国内流通の結接点であり、大坂商人が積極的に全国経済とかかわっていることは、以上のわずかな事例からもうかがうことができる。このような全国へ眼を向けた大坂商人の活躍は、当然ながら近世都市大坂の都市としての性格や雰囲気にかなり深くかかわっていると考えられる。江戸が俗にいう政治都市であって、誰にでも気軽に開かれた都市ではなかったことはいうまでもなく、京都も反江戸的な雰囲気をもつ面があるとはいえ、かなり閉鎖的な構造と機能の都市であることを考えるならば、大坂の開放的性格は大坂の個性とよんでもよい。

（四）旅人の「大坂」発見

江戸や京都にくらべて開かれた都市としての大坂は、旅人にとってもかなり楽しい都市であったにちがいない。医業のかたわら江戸で狂歌を楽しみとしていた平亭銀鶏は、訪れた大坂の魅力にひかれて大坂で数年を過ごしてしまった男である。(25) 彼の著わした『浪花雑誌街廼噂』の冒頭は次のように書きはじめられている。

摂津国大坂ハ古より入津集会の地にして南海浜を受、北に山をかまへ、寒暑程能来りて、風俗至つて実義ある上国なり。されば人民もいとおだやかにして諂ふことなく、諸国運送のいとまには風流の道に心を寄する人いと沢なるゆえ、国々よく入込処の漫遊家もひとたび此地に遊ぶときは、思ハず足を留むる者昔より今に至る迄其かず挙てかぞへがたし。夫のみならず、市中の美麗家作のありさま、他国の及ぶ処にあらず。実に是繁栄他郷にならびなき大都会の名地なり。(26)

いささか大坂をほめすぎかといった調子の表現であるが、これは平亭銀鶏がうわべだけの美辞麗句をつらねる文筆家だったからではなく、大坂の魅力とか良さといったも

のを、大坂で生活してみることによって体感したあらわれと見るべきなのであろう。平亭銀鶏は大坂人の気づかなかった大坂のよさを発見した一人だといえよう。

平亭銀鶏は、この物語に万松と千長という江戸ッ子の二人づれを登場させて、大坂の人情や風俗をたっぷり堪能する大坂見物をさせている。この『浪花雑誌街廼噂』は、万松と千長に仮託した平亭銀鶏の大坂見聞記であるわけだが、大坂の方言や物の名前からはじまって、町並景観、家作の表構え、子供の遊び、食べ物、遊里、書物、夜店、銭湯、祝儀、祭礼等々江戸と比較しての大坂が興味深く語られている。

江戸と大坂、またこれに京都を加えた三都比較論は、江戸時代の後期にはかなり流行し好まれた趣向であったらしい。都市を比較してみる視点が喜ばれたということは、江戸時代後期の都市がそれぞれに強い個性と魅力をもっていたということであろう。

三都比較論としては、曲亭滝沢馬琴の『羇旅漫録』がよく知られている。しかし、馬琴の場合には文人として、文人関係の史跡への関心がとりわけ強いことと、三都の比較という視点を強調しすぎているためか、平亭銀鶏のような大坂への愛着や大坂のよさを発見しようという姿勢がまったくない。

たとえば、『羇旅漫録』には「一体大坂はちまたせまく俗地にて、見べき所もなし」とか、「大坂にてよきもの三ツ、良賈（オホアキヒト）、海魚、石塔、あしきもの三ツ、飲水（カモ）、鰻鱧（ウナギ）、料理」というように淡々とした書きぶりが多い。[27] これに対して『浪花雑誌街廼噂』では「万松モシ千長（せんちよう）さん、此（この）通りの綺麗なことを御覧じゃし、犬の屎（くそ）などハ薬にしたくも見えやせん。千長さやうさコレジャア提灯なしに歩行（あるい）ても踏つける気づけひがなくッて安心で御座りやす。昨日（きのふ）も御咄（おはなし）申通大坂の家の造りかたハ、どふもいへやせん。二階に格子といふものがなく、皆窓の四方を油石灰（しつくい）で塗切るといふものだから第一火之用心もよく、先見附（まずみつき）が立派で、どふもいへやせん此処（ここら）の家作（やづくり）ハなほいゝやうだ。そして左右の土腐（どぶ）を御覧じゃし。残らず切石でたゝみあげて、どぶ板といふハなし。何と綺麗ちゃア有やすめいか」[28] といった調子で、同じ他都市との比較という視点はもっていても、常に大坂のよさを見い出そうという姿勢をくずしてはいない。

『浪花雑誌街廼噂』は、本文中に「今天保六年」という記述が見えるので、[29] 一八三五年ころの成立と考えられるが、大

坂びいきの江戸ッ子が見た天保ころの大坂について、もうすこし言及しておこう。大坂では各町ごとに行燈をかけているが、その横に「往来安全」という文字が書いてある。そこで銀鶏は、千長さんに「こんな善ことは、一寸したことでも諸国へ知らせて真似させたいものだ」といわせている。[30] また、町の入口の木戸の柱には、町の名が書いて打ちつけてある。江戸では各町の天水桶に何町何町目と書いているのだが、「木戸の入口のはうも、早く眼について能御座りやす」とやはり千長さんに言わせている。[31]

平亭銀鶏の市中の景観や風俗に関する観察眼は、外国人のそれともまた異なって、非凡でなおあたたかさがある。江戸の天水桶は文字どおり木製であるが、大坂の石造の天水桶はとくに眼につきやすいともいう。商売面では、大坂は江戸にくらべて何んでも小分けにして安価に売っているところに特長があるという。たとえば、枝豆、薩摩芋、栗、柿などの野菜や果物にしても、土器にのせて、一文、二文、三文と盛り分けて子供でも買いやすくしてある。[32] 豆腐も、江戸では一丁六十文するが大坂では江戸の半丁よりさらに小さくして十二文で売っている。[33] 八百屋でも茄子、白瓜、芋、大根などを一山ずつに分けていくらと札をつけて売り出してくれるので買いやすいという。[34] 大坂では心斎橋筋に本格的な本屋が四、五〇軒も集中しており、同業者街を形成していること、大坂は昼だけでなく夜もまた楽しめる街であることなどにも、銀鶏は注目している。

平亭銀鶏は大坂の夜店のにぎわいについて、「浪花なる順慶町の夜店のにぎはひ、高麗唐土ハいざしらず、我日の本の君が代に、かゝる目出たき夜の景、繁花を極めしありさまハ、余国にたえてあるべからず。商人の燈火は天にかがやき、街の提灯は星かとうたがふ」[35]と、かなりかざって書いてあるが、菜種油の普及で夜の世界が相当に明るいものになっていたことは事実であるし、ことに水の都大坂の場合、灯火が水に映ってとりわけ美しかったことも想像できるところである。同じころ、江戸でも浅草見附から両国橋、堺町辺、人形町あたりでちらほらと夜店が見られつつあったが、これも大坂の順慶町や心斎橋筋清水町辺などで毎晩夜更け迄にぎわう夜店の風潮が江戸へ伝わったものであろうと、銀鶏はみている。[36]

『浪花雑誌 街廼噂』の万松・千長の二人連れよりも、二五年ほど前に大坂を訪れた二人連れがあった。文化六年（一八〇九）に出版された十返舎一九の『東海道中膝栗毛』八編に

登場する弥次郎兵衛と喜多八の二人である。二人は伏見から淀川を下る三十石船の昼船に乗って、たそがれ時に大坂八軒に着いた。宿をさがして堺筋から日本橋へ出て、長町七丁目の分銅河内屋に宿をとっている。二、三日逗留するつもりの弥次郎兵衛・喜多八が翌朝市内見物に出かけようとすると、番頭が案内者が必要であろうと、佐平次という男をよんで案内にたてさせた。

弥次郎兵衛・喜多八の来坂よりはのちの史料になるが、天保七年（一八三六）刊行の『浪花講定宿帳』によると、江戸、京都、奈良、大坂などの都市では、浪花講加盟の旅館が観光客のために案内人を世話するしくみがあった。たとえば、京都では「かめや吉兵衛」と「まつや吉兵衛」という二軒の旅館がその世話をし、東山の案内賃二五〇文、西山の案内賃三〇〇文というように、京都観光には二日を要する観光コースがあった。奈良では「小刀屋善助」の旅館が案内の世話をしたが、奈良は案外見るところが少なかったのか、案内賃は半日六四文となっていた。大坂では日本橋北へ三丁目（堺筋周防町）の「まつや源助」（通称「まつ源」）がその世話所であり、市内の案内賃は二〇〇文であったという。[37] 十返舎一九の叙述からすると、そうした観光案内人のようなものが、文化年間ころにはすでに登場していたと考えてよいだろう。

弥次郎兵衛・喜多八に同道した佐平次が、有料の案内人だったかどうか定かではないが、かれらがどのような道順でどんなところを見物したかを追うことで、江戸時代後期の観光案内人が大坂をどのように演出してみせていたか、また旅行者が大坂のどんなところに興味をいだいていたのか注目してみよう。

まず一日目は、旅宿から長町を北へ道をとり、高津宮にあがって、市内の町々はもとより住吉沖、淡路島、兵庫の岬などを見はらし、谷町で居酒屋に入って休憩。安堂寺町から大坂城前に出て御城を見、天満橋にいたると淀川を行き交う遊楽船のにぎやかな音曲と、橋の上から船客をからかう喧嘩もどきの喧噪に出会う。天満橋を渡って市の側とよばれる川岸通を西へ入ると天満の青物市、ここを抜けて天満宮の境内へと至る。境内では料理茶屋、水茶屋、楊弓場が店をならべ、能狂言、「うき世のものまね」、山海の珍物見世物、芝居、軽業、曲馬乗などの見世物がにぎやかであった。天満宮をあとにして天神橋を南へわたる。そこで座摩宮の富札を拾ってしまって、物語は一日目の見物をは

しょってしまい、富札一件の大騒動となってしまう。宿へとって帰った三人づれは、あらためて堺筋から順慶町の夜店へと出なおし、瓢箪町の新町廓へとくり出している。

富札一件の落着した二日目は、生玉社に詣うでて田楽茶屋、見世物、はみがき売、女祭文などの賑うなか、粟餅の曲舂という曲芸的な餅搗きを見た。小野道風の書いた四天王寺の鳥居の額の下をとおり、広大な境内、堂塔の荘厳に接する。順拝ののち住吉街道を南へとり、天下茶屋を経て住吉社に至るが、社付近の茶屋は家作も美しく、着かざった女中が客をよびこむ。ここの名物は金魚、酢蛤という蛤の刺身、ごろごろ煎餅、唐がらし、昆布、竹馬、糸細工などである。出見の浜の高燈籠も有名であった。

十返舎一九の『東海道中膝栗毛』は、享和二年（一八〇二）江戸で発売されると人気をよび、文化三年（一八〇六）には一九仙人作という『膝摺木』に弥次郎兵衛・喜多八が登場して、生玉社、天王寺、住吉社などを遊歴したという。[38] 同年には、また金太楼桃尻山人作『住吉綾栗毛』が刊行され、いわゆる膝栗毛物の出版が大坂を舞台としてはじまったといわれる。平亭銀鶏の『浪花雑誌 街廼噂』も、そのなかのひとつに数えられるが、『道中尻から毛』と題されていながら、実は江戸ッ子青年武士のひとり旅の旅日記で、史料としてもきわめて貴重な日記が、安政五年（一八五八）に書かれており、林美一氏がその著書のなかで紹介されている。[39] このなかにも、大坂の観光と遊興が詳しく語られていておもしろい。

本名井上重寿、通称を左太郎と自称する江戸ッ子青年武士は、『道中尻から毛』によると、安政五年九月十日江戸を出発、同月二十七日奈良から暗峠をこえて玉造口から大坂に入った。玉造口からは、安堂寺橋通を経て長堀橋筋を通って浪花講定宿元の松屋源助方に宿をとっている。源助方の裏の畑では、女郎たちが内職として夜タカのような格好で畑仕事をしているのをしっかりと観察している。

翌二十八日は晴天で、真田山から玉造稲荷、森の宮から御城近くの眺望のよい杉山、桜の宮は対岸から見て、天満橋を北へ渡って町奉行与力屋敷の西に位置する東照宮へ寄り、そこから天満宮へまわって天神橋へと出ている。東横堀川に架かる高麗橋の東詰では、城の櫓のような建物で評判の矢倉屋敷を見物、このあたりでは三井呉服店や鴻池の両替店、虎屋の菓子店なども見たかもしれない。北の御堂、南の御堂、座摩社のあとふたたび北へもどって淀屋橋から

堂島の米市、北野天神をまわり、上福島のかささぎの森、五百羅漢堂、野田から安治川橋を渡って川の舟番所、そして天保山まで足をのばしている。左太郎はよほどの健脚であったことがこの見物のコースからうかがえるが、一日で大坂の見所の大部分をまわっている。帰路は、天保山から木津川をこえて北堀江の和光寺に寄り、阿弥陀池を見て、新町の廓へと足を踏み入れ、そのまま夜をすごして、旅宿へは帰らなかったという。

朝帰りとなった二十九日は、宿のすぐ東の高津宮から生玉社、清水の舞台、四天王寺へと南へ下り、五重塔で市中を展望、茶臼山、天下茶屋を経て住吉に至りいったん宿の松源へ帰ったのち、夜は難波新地へ出かけていった。三十日からは劇場めぐりに熱中しはじめた。

弥次郎兵衛・喜多八もくり出し、左太郎も一夜を過ごしてしまった新町遊廓は、江戸の吉原、京都の島原とならぶ江戸幕府公許の遊里であった。喜田川守貞の『守貞漫稿』では、新町は私名であり、本名は瓢箪町というとある。[40] なお、同書によると、大坂には非官許の遊所が三〇余所あったが、天保十三年（一八四二）の幕令で廃止となったり移転させられたりして、天保改革後は、新町遊廓のほか、北之新地（本名曽根崎新地）、難波新地（生玉社前の馬場先の娼家を合併）、坂町、幸町等の数カ所となった。しかし、安政五年の春に幕令が改められて、島の内以下一四カ所が旧地に復活して、非官許の遊女屋となったという。[41]

江戸時代後期の大坂には、格式ある新町廓から非公許の場末の遊所まで、さまざまな歓楽地があり、たとえば北の新地が淀川近辺の蔵屋敷関係の役人や商人たちを顧客としたり、生玉社前の馬場先が観光客、堀江が船頭・舟子をというように、それぞれの遊所は、大坂各地の土地柄と深く結びついて成立していたのではないかと考えられる。

遊里だけでなく、芝居もまた大坂の代表的な遊興的性格をかたちづくっていた。『道中尻から毛』の左太郎は、廓好きであるとともに、大変な芝居好きであったらしい。左太郎は、博労町の稲荷境内にある操人形芝居、道頓堀角座で嵐璃寛の「新薄雪物語」、嵐三右衛門・三枡大五郎の「嫗山姥」の狂言を見、同じく道頓堀の竹田の芝居を見、さらに鰻谷の子供芝居、北野天神の境内芝居と実に五日間にわたる芝居見物をしている。[42]

大坂の芝居の中心は道頓堀であり、ここには俗に大芝居とよばれる角座・中座、中芝居または浜芝居という大西座

・角丸座(文政十年焼失)、小芝居という若太夫座・竹田座が軒をならべ、道頓堀の浜側には芝居観客のための茶屋がまた軒をつらねる賑いであった。

道頓堀の五座または六座のほか、曽根崎新地、堀江、市の側にも芝居はあったが、天保改革でこれも廃止になったと『守貞漫稿』は伝えるが[43]、同書によると、宮芝居といって天満天神、座摩社、博労町稲荷社、高津宮等の社頭にも芝居はあって、「其中博労いなりには二所ありて、南門内のを文楽の芝居と云、義太夫操のみ興業して、虚日なく大当」りしたという[44]。左太郎が見たのもこの操芝居であった。

道頓堀の角座は安政五年(一八五八)二月二十五日の火災で全焼したが[45]、同年十月には早くも再建され、同月九日の新狂言を左太郎は楽しみにして出かけている[46]。大坂の各所に常設の芝居小屋が営業していたこと、全焼の角座がわずか七カ月余で再建されて興業をはじめていることなどは、芝居が大坂の市民たちや遠来の来訪者たちにいかに珍重され、代表的な遊楽として広くもとめられていたか推測できよう。

もちろん、こうした名所めぐりの観光や芝居見物などの遊興が、旅人や都市民の娯楽として定着するには、生活者にとっての都市規模というものが大切となる。万松・千長はもとより弥次郎兵衛・喜多八にしても、左太郎にしても、徒歩による移動を前提としている。自らの足で名所・史跡をたずね、劇場をめぐり歩いていることに注目したい、しかも、同一の宿屋を起点としている。このことは、大坂が江戸時代においては大都市に属するとはいえ、まだまだ人間的規模のなかにある都市であったことを意味する。旅人たちが同一の宿屋を拠点として大坂の到るところに出没していることから、大坂の住民たちにとって市中あるいは近郊をも含め、そこは人間的な認識と理解を深めることが可能な境域であったことが推測される。

(五) 近世的大大坂の成立——都市と近郊

近世の都市は、周辺農村部との深いつながりを前提として成りたっていたのではないだろうか。大坂という都市に焦点をすえてみつめてみると、一層その感が深い。経済的側面はもとより、人々の意識においてもそれはきわめて大切な要素であったに違いない。

大坂の市街は、東部の上町台地とその西方に広がる低地から構成されているが、上町台地からは市街を一望すると

ともに、周辺の農山村部やはるか海上までも見はらすことができた。元禄四年（一六九一）に来坂したケンプェルは、上町台地の新清水近くの料理屋浮瀬と推定される宿舎からの景観について、「この傍なる幾多の家屋及びここにある観音堂とともに、高き削りなせる山の上にありて、大坂地方は町々を越えて海上までも見渡すことを得」たとのべている。[47] 享和三年（一八〇三）に来坂した滝沢馬琴も、「天王寺の傍新清水より遙に西海を眺望すれば、左にかつらき山金剛山二丈が嶽むかふに聳、淡路島はるかに見ゆるなり」と『羇旅漫録』で書いている。[48] また文化六年（一八〇九）刊の『東海道中膝栗毛』でも、高津宮見物のくだりで、十返舎一九は「サア見なされ〳〵。大坂の町々蟻の這ふまで見へわたる。近くは、どとんぼり（道頓堀）の人くんじゅ（群集）、あの中に坊さまが何人ある、お年寄にお若い衆、お顔のみつちゃが何ぼある、女中がたの器量ふきりゃう、ほっこり（焼芋）買ふて喰てござるも、浜側でしし（小便）なさるも、橋詰の非人どもが繻絆の虱なんぼとったといふまで、手にとるやうに見ゆるが奇妙。また風景を御らん（覧）なら、住吉沖に淡路島、兵庫の岬、須磨あかし（明石）、大船の船頭が飯何ばいく（喰）た何くた角くたもいっきにわかる」と遠眼鏡の男にいわせている。[49]

都市のなかから周辺の山や海が見え町の人々の目に田や畑が見えるということは、高層の建物の少ない江戸時代にあってはあたりまえのことであった。したがって、町の人人でさえも　山にかかった雲のかたちや流れる方向と早さを見て、今日・明日の天候を予想することも可能であった。都市の人々が山を見て、あるいは海を見て暮らすことは、経済的損得だけでなく、村の人々とその生活を思いやることにもつながる。風の強さを感じて作物を心配し漁船を心配する気持の生ずる前提条件は充分に存在していたと考えられる。享和二年（一八〇二）七月淀川増水による大洪水が発生、淀川本流と支流各所で堤防の決潰があり、大坂近郷の村々に甚大な被害をもたらし、大坂市中も天満・天神両橋をはじめ大小の橋が落ち、低地はいたるところで浸水した。[50]

この大災害に際し、罹災者を道頓堀の各場や京橋松ノ下の仮小屋に収容して衣食を与えたが、大坂市中の人々による近郊農民への施行はとくに注目をあつめた。文化元年（一八〇四）七月、享和二年の大洪水罹災者に対する大坂市民の救助活動に関して、特別に江戸の幕府からの褒賞が

おこなわれたのである。その通達書に「去々戌年摂河洪水込入難渋之村方へ施行物差出、又者寄特成取計いたし候もの共、一同寄特成事ニ候、依之三郷之内施行いたし候町々六百拾三町并新建家場五ケ所、為御褒美白銀弐百拾五枚被下之候間可致割賦」とあり、[51] ほぼ大坂三郷の全町が施行にあたったこと、なかには家を失ったものに対して、緊急に新しく家を建てて安価に提供したものもあったことが知れる。町と村との日常的なつながりが、人々の心に助け合いと町づくり村づくりの精神を育んでいたとみることができよう。

江戸時代の都市と農村は、近代になってそれらは失われるのだけれども、さまざまな面で直接的なかたちで、深く結びついていた。大坂でいえば、堂島から周辺農村部や在郷町への飯米の供給、周辺農村部から市中への蔬菜等の搬入、屎尿や塵芥など都市廃棄物の処理をめぐる問題などがそれである。

井原西鶴は『日本永代蔵』のなかで、大坂で旦那様とよばれている人々も、昔は「是皆大和、河内、津の国、和泉近在の物つくりせし人の子共」であったと述べている。[52] 大坂市中への周辺農村部からの労働力と人材の流入というかたちで、都鄙の交流が早くからあったことはいうまでもない。

ところで、江戸時代も中期以降になると、「物つくりせし人」である大坂周辺の生産農民たちが、大坂の堂島米市場を経て搗米屋から飯米を購入するという珍現象があらわれる。『芦政秘録』には、飯米の近在への供給について次のように記されている。[53]

大坂市中飯米は勿論之儀、町続在領搗米屋ニ而も、先前より堂嶋浜方ニ而諸蔵米買受、日用取続来候場所は、市中同様浜方より米売出、夫々無差支様取引仕来候ニ付而は、右市在一日分出来高、浜方休日之外、日々凡千五百石程宛之見積之由、右之外最寄市在江も同様堂嶋より米積出、其先々日用融通仕来候箇所、左之通

難波村　木津村　西木津
今宮　天王寺村　南北平野村
勝間村　住吉家（新安立町）　堺両郷
平野郷　八尾（久宝寺）　尼崎
伝法　稗島（大和田）　福村（佃村）

西宮　灘口　東在
北在　（京都伏見）

難波村・木津村の近在農村から京都・伏見までも、堂嶋から飯米が供給されているというのであるが、こうした大坂近在への飯米供給の事実は、天明七年（一七八七）の凶作で大坂市中の米不足がおこったとき、大坂町奉行所が近郊への飯米供給をさしとめる指令を出していることからも明らかである。[54]

農村が飯米を購入するということは、近在農村が米作りをしていないということ、つまり米以外の商品作物の栽培の方に、農業生産の中心が移っているということ、また周辺農村部の都市化がかなりすすんでいるということなどが考えられる。

大坂の場合、こうした近郊の発展が十九世紀に入ると大坂市中に深刻な影響をあたえる都市問題となって顕在化している。いわゆる町続き在領における新家建ての急造にともなう市中の衰微という問題である。文化十四年（一八一七）正月の、「三郷火消年番惣代願書」によると、「当時大坂市中ニ明借屋等多く困窮仕候ニ付、追々掛屋敷等も離、其外渡世向も相窮メ（中略）、何分明家等多く、其上近年町続在領ニ追々新家仕候故之儀ニも可有御座哉。尤、結構成御田地を建家仕候義も無拠儀とハ可有御座候得共、右之通追々建家有之候而ハ、弥以市中難渋仕候儀ニ御座候」[55]とあり、また同じく天保五年（一八三四）十一月の「三郷惣代火消年番惣代口上書」にも、「近年市中続村方新建家追々相増、当地借家之者右在領へ引越」とか、「在領段々繁昌仕、市中近来明家多く有之段相歎仕候」[56]と、いわゆる都市圏のドーナツ化現象に近いものが早くも見られることを説いている。近郊の発展、三郷市中の衰微の理由として、三郷火消惣代たちは「右建家入用之儀者御年貢銀のミニ而、川浚冥加金、御用人足賃銀幷火消人足賃銀等、諸入用相掛不申」という状況で、「市中建家とは格別勘定合宜敷故」であるとしている。[57]経済的な負担が、市中よりも在領の方が軽いからであるといい、町場化していくところを大坂三郷に組み入れて都市経営の各種負担を都市民全体で請負うようにすべきであると、解決方法も惣代たちは示している。

また、『大阪公事出入取計書』によると、大坂三郷の文化元年（一八〇四）改めの空家をのぞく「住家数」は約九万八〇〇〇軒であり、人口は「人別帳ニ有之分」が三〇万人

ほどなのだが、「諸方より出入之分」が一〇万人ほどはあったという。[58] この数字がそのまま信頼できるかどうかは検討しなければならないものの、正規の大坂市民三〇万人のほかに一〇万人がさらに入りこんでいたというのである。この人口差を、今日的に昼間人口と夜間人口の差と理解することは早計だとしても、大坂への人口流入が大量にしかも急速にすすみつつあったことは認めなければならないだろう。おそらく、この一〇万人のなかには諸国から商売や観光のために大坂を訪れていたものもあったであろうが、そのほかでは近郊近在の住民たちも相当に含まれていたのではないだろうか。

『手鑑拾遺』という大坂町奉行所の記録によると、大坂三郷古町町々で湯屋を開業する者が一一九人であるのに対して、近在の村々に湯屋を営む者が八四人もあり、ほかに三郷町続きの新建家地や新地などに約六〇軒ほどの湯屋があるという。[59] また煮売屋も三郷古町町々では二六六人であるのに、町続きの町や新地・近在村々を合わせるとおよそ四五〇人にものぼるという。[60] このことは、大坂が十九世紀に入ると、三郷市中から周辺部へ拡大しつつあること、いいかえるなら近郊をも含めた「大」大坂が成立しつつあるということを示しているといえよう。

都市化の進行と近郊における商品作物栽培の発展は、屎尿や塵芥などの都市廃棄物をめぐる問題をも生じさせた。木綿・菜種・蔬菜などの栽培では、油粕や干鰯などの貨幣で購入するいわゆる金肥の導入が重要である。しかし、人糞肥料もそうしたなかでなお大きな比重を占めていた。むしろ、商業的農業の展開は人糞肥料の大量確保を一層必要とさせたといってよい。

小林茂氏の研究[61]によれば、早くも寛永六年（一六二九）には西成郡江口村で、伏見や大坂から「屎（こえ）」を買い入れている事実がみられるという。しかし、一般的には町方における下屎（しもごえ）の汲取りは、江戸時代前期には町方と村方の相対取引であったといわれ、[62] 町方としては処理に困る屎尿を引きとってもらう、村方では肥料として屎尿を町からいただくということで、とくに肥料代金として取り決めがあったわけではなかった。農民の側からお礼として自作の農産物を町民に与えることで落着していたようである。

都市住民が増大したことと、農業における下屎（しもごえ）重視のなかで汲取りに関する一定の方法と組織づくりは必然的となっていったようで、十七世紀の末には、大坂の町方下屎仲

間一二六人と河内村々百姓とが、摂津の村々百姓を相手に争論をおこしたりしている。[63]

屎尿が単なる都市廃棄物ではなく、肥料として注目を集める時代には、農村側は何とかして一定量を確実に安価に手に入れようと考えるし、都市住民側は売れるものならなるべく高く売れたらよいと考えるが、また引取り手がなくて溜りすぎても困ってしまう。そうした双方の気持にとりいって屎尿の汲取り、運送、販売にたずさわることで利を得ようとする商売人たちが登場してくる。汲取りの予約や屎尿代の支払いをめぐる争いが、町家と農民と業者の間で発生するようになり町奉行所がその調停にあたったり、争論に判決を下したりするようになる。大坂でもいろいろな経過を経ながら、一応明和六年（一七六九）に摂津・河内三一四カ村からなる在方下屎仲間がつくられ、これが基礎となって各村ごとに大坂市中の町々の汲取りを割りあてることで、相互の問題を解決することが企てられた。[64]しかし、この町家の屎尿汲取りをめぐる問題は、いろいろと微妙な権利や利害がからんで、十九世紀に入ってもなおもめつづける。

屎尿だけでなく、市中の塵芥処理でも都市と農村は相互依存の関係にあった。安永二年（一七七三）、三郷町家から月単位に銭を集めて塵芥処理を請負いたいという願い出があったため、大坂町奉行所ではそれについての差し障りの有無を町人に問うたが、町民からの口上書に、「三郷町家塵芥之儀、是迄百姓掃除致取来候へ共、田畑之助ニ相成物斗持帰リ、石、瓦、木切、竹切等ハ残置候」[65]とあるので、市中の塵芥処理は原則として近在の農民が取扱ってきたことがわかる。もっとも肥料とならない塵芥については、農民がもっていってくれないので、家別に一カ月一〇銭から二〇銭ずつ出し合って人夫を雇って屋敷廻りや道路などに穴を掘って埋めることにしていたらしい。塵芥処理請負出願者の出願理由は、こうした各自勝手な処理法では町並みがでこぼことなって不都合であるから、毎日清掃に勤める人夫をもって、町域をこえて高低を見定め埋めるならば、町並みもきれいになるのではないかというにあった。[66]

屎尿や塵芥の処理は、快適な都市生活を営むうえでは大切なことである。都市化がすすめばすすむほど、それは大きな問題となるが、都市民と近郊の農民が協力することで、近世都市大坂の町づくりが行なわれてきたことに注目しておきたい。

（六）　ベカ車の取締りをめぐって

近世の大坂においては、河川と運河による水運の役割が大きいことはいうまでもないが、陸上交通機関としてのベカ車の発達も忘れてはならない。江戸では、俗に八人の代わりをするという本格的な荷物輸送車である大八（代八）車が十七世紀後半から製作されて活用された。[67] 大坂では道路幅の狭さから大八車より小型の簡便なベカ車が流行している。喜田川守貞の『守貞漫稿』に、「大坂輦車、俗にべかくるまと云へり、輪は板を以て製之、簀子も又全くに板を張る。長き物二間、短き物六、七尺。前に一、二条の綱を付け二、三夫曳之、背にも一、二夫在て押遣る。此車は後を揖と云進退を掌る。幅も三尺余、代八車より狭し。是は当所の道路甚だ狭きが故に応地て製する也」[68] とある。

大八車は、牛車と同じく羽七枚矢二一本からなる本格的車輪をもつ車であるが、ベカ車は板材を丸く製して車輪とした簡便なものであったから、[69] 製作費も安く手軽な荷物輸送車であった。

この便利で安価なベカ車は江戸時代中後期に大坂で大流行し、水運にたずさわる人々の生活をおびやかし、また橋や道路の損壊を大きくするなどの都市問題をひきおこしている。ベカ車の便利さをもとめる大坂商業界の趨勢と従来からの運輸業者の生活との関係、橋梁・道路の破損や交通事故の発生防止等々の公害問題とを、大坂の人々はどのようなかたちで折り合いをつけてきたのであろうか。ベカ車問題への対応をさぐることで、近世大坂の智恵や配慮を具体的にのぞいてみることにしよう。

安永三年（一七七四）九月の触書には「へか車と唱、材木石等を裁（載）セ運ひ車（候）、近年増長いたし、橋々曳通り候節、往来人之妨ニ相成、其上橋々損強く、橋懸り之町々難儀之趣相聞候間、向後右車橋々曳候儀差留候」という条文で、ベカ車が橋を通るために通行人の妨害になること、橋の破損が甚しいので橋の修理を担当する近辺の町々が経済的負担に勘えがたいという理由で、ベカ車の橋上通過を禁止している。[70]

寛政三年（一七九一）十二月令は、「へか車之儀人力を助ケ（行カ）候、人歩ニ而可相運賃銀ヲ減候事、其益可有之哉ニ候得共」と、省力化と経費節減面での利点は認めつつも、ベカ車が安永三年令にもかかわらず、堀をこえ、橋をこえて遠方まで荷物を運搬するため、上荷茶船とよばれる水運業者

の荷物が減少して生活が破綻に追いこまれているという上荷茶船仲間の陳情をそのままとりあげている。上荷茶船は多くの運上銀を納め御用には役船を差し出すなど御公儀のために早くから役立っているが、ベカ車は新規であり何の御用も勤めてはいないので、本来なら禁止されてもしかたがないようなものなのだから、船方の仕事の障害になるようなことをしてはいけないと令している。さらに近年ベカ車が大型化して、夜間も通行するなど、騒音と溝石や大道の破損が激しくなっているので、ベカ車を大きくすること、夜間曳き通ることも禁止すると追加している。[71]

寛政十一年四月、大坂町奉行は連名で、ベカ車が近年とくに増加し、「商売人に寄候而者家別に拵」える状況であること、「余計之重目之品ヲ壱度(一脱カ)運送」するなど、「荷主勝手宜敷、弁利之品」として増長していると現状を分析し、「馬付荷物」をひきとってベカ車に積みかえるなどは馬方の渡世を奪うので禁止すること、嵩高な品物を積んで橋や道幅の狭い町内をとおり、水道や石垣をこわすなど住民の難儀となっているので、横暴なベカ車は見つけ次第に町々においてさしとめるようにと令している。[72]

寛政十三年二月三日の触は、ベカ車の橋梁通行禁止令に対して、近ごろ橋詰から橋向うまで荷物をかついで渡って、橋向うからまたベカ車をつかって遠方まで運送することがおこなわれているが、これはやはり船方の渡世の支障になるので、ともかくベカ車による橋を隔てた遠方輸送を禁止するとしている。[73] ここには庶民の智恵と法の精神の徹底との相克が見える。

こうして、ベカ車取締は十八世紀を通して自粛令の繰りかえしをしていたが、文化元年十月にいたって、具体的な規制が触れられた。[74] その第一は車の大小にかぎらず竹・木・石・瓦のほか積載貨物は目方三十貫目に重さを限ること、その二はたとえ車が小さくとも一人で車を扱うことは禁止し、一両毎に前と後に二人がつきそい往来人の怪我のないよう注意すること、その三は竹・木・石・瓦など重量のある荷物を積んだ場合には車方の人夫を増やすこと、その四は車に持主の町と名前を書かせて、事故あるときは糾明することであった。そして車数の調査結果、三郷のうち二〇〇町余はベカ車を所持していないが、とくに不便であるといったことも聞いていないので、追々にベカ車数を減少させるよう取りはからうべきであると指令している。

文政七年十一月令は、文化度調査の三郷町中一六七八両

の車数を超えないように守るべきこと、ベカ車に下屎（しもこえ）・小便を積むことは万一過ちがあった場合町中不浄となって往来にさしつかえるので禁止すること、車に持主の町名と名前の記入を怠らないこと等を令した。[76]

安政五年三月の「へか車取締之事」は、安永三年令以降の触をまとめて再認識させつつ、車の大きさについて枠の長さ六尺を限度とするとして大型化を規制する一方、極端に小さな車をつくって登録をのがれようとする者に対して、車輪の直径三尺五六寸から三尺までとして、三尺以下の車の製造を禁止している。さらにベカ車製造者の登録と車の焼印打ちの手続きについても具体的な指示を下している。[76]

大坂町奉行所によるベカ車規制の法令を、年代を追いながらみてきたが、法令の文面からはベカ車の増加と活動範囲の限定をしようとする規制が、効果をあげていないことがうかがえた。そして、おそらく運上銀の上納や御用船馬の供用という幕府側への利益が勘案されてのことであろうが、たてまえとしては上荷茶船や馬方の生活維持を前面に出し、また橋梁・道路・石垣・溝石等の破損、往来人の支障や事故など地域住民の苦情をくみあげるというかたちで、ベカ車の取締りにあたっている。

便利さや経済的必要性は認識しつつも、住民の生活との折り合いをいかにつけていくかという視点が、このベカ車取締りには貫いているようにみえる。もちろん、都市住民の声なくして、そのようなベカ車取締令はありえなかったであろう。

しかし、ここでとりあげた法令では、ベカ車の持主たちの側の、ベカ車を商売のなかに活用していくことでの生活の変化や問題については明らかでない。ベカ車という便利で省力化と経費節減に役立つ車を導入することが、営業や町内のつきあいや都市観にどのような影響をあたえていくのか、是非追求してみたいものである

〔註〕

（1）大阪と大坂の文字を使い分けることには異論があるかもしれないが、本論では通説的に明治維新以後は大阪、以前を大坂と表記する。歴史的事実として、江戸時代に大阪、明治期に大坂の表記が見られたことを否定するものではない。

（2）呉秀三訳『シーボルト江戸参府紀行』（駿南社蔵版）三八五頁～三八六頁。文中の大阪の文字は訳者の用法による。

（3）呉秀三訳『シーボルト江戸参府紀行』五六八頁。江戸参府の帰路ふたたび大坂に立ちよった時の観察である。

（4）呉秀三訳『シーボルト江戸参府紀行』五六八～五六九頁。

(5) 山田珠樹訳『ツンベルグ日本紀行』（駿南社発行）一九一～一九三頁。
(6) 山田珠樹訳『ツンベルグ日本紀行』一二七～一二八頁。
(7) 山田珠樹訳『ツンベルグ日本紀行』一八九～一九一頁。
(8) 『摂津名所図会』巻二には、孔雀やその他の諸鳥を客寄せのために飼っている茶店があって孔雀茶屋とよばれていたと絵入で紹介している。また、『改正増補難波丸綱目』には「鳥中買、備後町安土町之間かちや筋鳥屋町也」とある。ツンベルグの「小鳥の通」という表記からすれば、孔雀茶屋よりかちや町筋が妥当かもしれない。
(9) 『摂津名所図会大成』巻之四「種樹屋花園（うえきやのはなぞの）」の項にこの花園は二ツ井の東にあって吉助という注記があり、また浪花には、植木屋が下寺町や天満のほか、北野曽根崎あるいは難波の新地など諸所にあるが、この高津の吉助がもっとも早く著名で、「庭中にハ諸の草木を多く貯へ、四時に花の絶ゆる事なく、珍奇の品類を鉢に育て、見も馴ざるもの数なり。且初夏の牡丹晩秋の菊等ハ花壇を造りて美観なり。雅俗ともに是を見んとて群集し庭中最賑わし」とある。
(10) 呉秀三訳『ケンペェル江戸参府紀行』（駿南社蔵版）二八七～二八八頁。
(11) 呉秀三訳『ケンプェル江戸参府紀行』二八八～二八九頁。
(12) 呉秀三訳『ケンプェル江戸参府紀行』二九二～二九三頁。
(13) 『浪花の風』（日本庶民生活史料集成第八巻所収、三一書房刊）四三五頁。
(14) 『諸色取締方之儀ニ付奉伺候書付』（大阪市史第五巻所収）六七五頁。また同書六六七頁には「諸国取引第一之場所」の語も見える。
(15) 『御用金之控』（大坂市史第五巻所収）一〇二八頁。
(16) 『蘆花分船』（浪花叢書第十二巻所収）
(17) 『摂州難波丸』と『国家万葉記』の関係、『摂州難波丸』と『改正増補難波丸綱目』の異同、『改正増補難波丸綱目』改訂版等々については、『校本難波丸綱目』（中尾松泉堂書店刊）の多治比郁夫・日野龍夫両氏による解説に詳しい。
(18) 京羽二重の分析については、小橋保宣氏他「京の町人」（『京都の歴史』第五巻第六章第二節、学芸書林刊）がある。
(19) 以下『改正増補難波丸綱目』の分析は『校本難波丸綱目』（中尾松泉堂書店刊）による。
(20) 『校本難波丸綱目』六四頁。
(21) 以上、いずれも『校本難波丸綱目』六〇～九三頁間の「御大名衆御蔵屋鋪幷留守居役人幷名代蔵本掛屋用聞名寄」による。
(22) 『校本難波丸綱目』一〇六～一三一頁。
(23) 元禄年間作成とされる『地方役手鑑』（大阪市史史料第十五輯、「大坂町奉行管内要覧」所収、大阪市史編纂所刊）によると、大坂三郷古町合計で五四八町。文政十二年改の『手鑑』（大阪市史史料第六輯、大阪市史編纂所刊）では三郷古町は五四五町、新地分を合わせると三郷町数は六二〇町としている。
(24) 『校本難波丸綱目』「諸商人之部問屋中買」一三二～一五一頁。
(25) 平亭銀鶏および『浪花雑誌街廼噂』については『浪速叢書』第十四巻所収の『浪花雑誌街廼噂』の解題があるが、銀鶏の略伝でさえ未詳である。なお、本稿の叙述はすべて『浪速叢書』所収本による。
(26) 『浪花雑誌街廼噂』（浪速叢書第十四巻所収）二五頁。

(27) 『羇旅漫録』（日本随筆大成第一期第一巻所収）二六二～二六三頁。
(28) 『浪花雑誌街廼噂』三一～三三頁。
(29) 『浪花雑誌街廼噂』五二頁。「今天保六年まで百五十六年になりやす」とある。
(30) 『浪花雑誌街廼噂』三一頁。
(31) 『浪花雑誌街廼噂』三四頁。
(32) 『浪花雑誌街廼噂』四三～四四頁。
(33) 『浪花雑誌街廼噂』四八頁。
(34) 『浪花雑誌街廼噂』四八～四九頁。
(35) 『浪花雑誌街廼噂』六七頁。
(36) 『浪花雑誌街廼噂』六八頁。
(37) 大阪城天守閣内田九州男氏の教示による。内田九州男氏「観光のメッカ(一)」（観光の大阪、一九八八年二月号）参照。
(38) 長友千代治氏「大坂の化政文化」（大阪府史第六巻所収）八一八～八一九頁。
(39) 大阪市立大学谷直樹氏の教示による。林美一氏『時代風俗考証事典』（河出書房新社刊）五四一～五五五頁。
(40) 『守貞漫稿』改題『近世風俗志』下巻七七頁。
(41) 『近世風俗志』下巻九四～九五頁。
(42) 林美一氏『時代風俗考証事典』五四八～五五一頁参照。
(43) 『近世風俗志』下巻五〇八～五〇九頁。
(44) 『近世風俗志』下巻五〇九頁。
(45) 『大阪編年史』。角座より出火、島之内および長町五丁目、九郎右衛門町延焼し、翌朝鎮火。
(46) 林美一氏『時代風俗考証事典』（河出書房新社刊）五五〇～五五三頁参照。
(47) 呉秀三訳『ケンプェル江戸参府紀行』下巻一一九～一二〇頁。ケンプェルの宿所が浮瀬であろうということについては、訳者の注記がある。
(48) 『羇旅漫録』（日本随筆大成第一期第一巻）二六一頁。
(49) 『東海道中膝栗毛』八編上（日本古典文学大系六二巻、岩波書店刊）四三六～四三七頁。
(50) 『大阪市史』第二巻二〇九～二一一頁参照。
(51) 『大阪市史』第四巻上四一七～四一八頁。
(52) 『日本永代蔵』（日本古典文学大系四八巻、岩波書店刊）四二頁。
(53) 『芦政秘録』（大阪市立中央図書館所蔵本）。
(54) 『大阪市史』第三巻一一八五～一二〇七頁。天明七年五月以降、大坂市中の有米払底による他所他国積み出しが触れられ、同年八月にいたって新米出来を理由に同令が解除されている。
(55) 『大阪市史』第四巻六六〇頁。
(56) 『大阪市史』第四巻下一一四七頁。
(57) 『大阪市史』第四巻下一一四七頁。
(58) 『大阪公事出入取計書』（東京大学法学部法政資料室蔵）。大阪城天守閣主任学芸員内田九州男氏の教示による。
(59) 『手鑑拾遺』（大阪市史史料第六輯所収、大阪市史編纂所刊）一三一～一三二頁。
(60) 『手鑑拾遺』（大阪市史史料第六輯所収、大阪市史編纂所刊）一三〇～一三一頁。

(61) 小林茂氏著『日本屎尿問題源流考』(明石書店刊)は、近世大坂の屎尿をめぐる本格的研究である。
(62) 『大阪市史』第三巻一八八～一八九頁。正徳三年十月の「覚」に「大坂天満下屎中買、前々者無数、百性直相対を以買取田地養来候」とある。
(63) 『大阪市史』第三巻一八八～一九〇頁。
(64) 『大阪市史』第三巻七六二～七六三頁。小林茂氏著『日本屎尿問題源流考』二四～二六頁。
(65) 『大阪市史』第三巻八一六頁。
(66) 以上、『大阪市史』第三巻八一六頁、「乍憚口上」による。
(67) 『近世風俗志』下巻四六七頁。
(68) 『近世風俗志』下巻四六八～四六九頁。
(69) 『近世風俗志』下巻四六七～四六九頁。
(70) 『大阪市史』第三巻八三九頁。橋の修理等に関しては、乾宏巳氏『大坂なにわ菊屋町』(柳原書店刊)参照。
(71) 『大阪市史』第四巻上一〇八頁。
(72) 『大阪市史』第四巻上三三四頁。
(73) 『大阪市史』第四巻上三六五頁。
(74) 『大阪市史』第四巻上四二九～四三一頁。
(75) 『大阪市史』第四巻上八三六頁。
(76) 『大阪市史』第四巻下二二三四～二二三七頁。